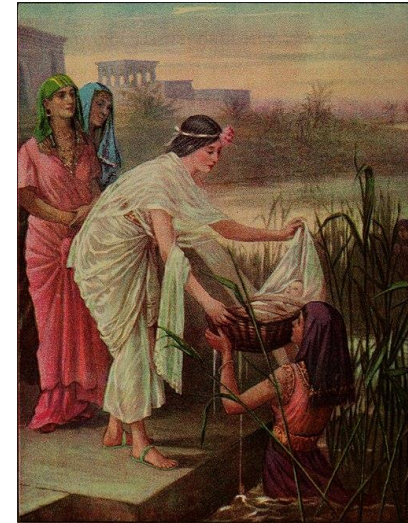


## 創世記・出エジプト記 通読

7月



(7月 30日)「出エジプト記 3 : 1~6」

神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」

(出エジプト記 3 章 5 節)

- ・羊飼いとなったモーセは、群れと共に神の山ホレブに来ます。すると柴の間で燃え上がる炎の中に主のみ使いが現れました。不思議なことに、柴は一向に燃え尽きません。これが、「燃え尽きない柴」の話です。
- ・モーセは近づいて、見に行きます。主のみ使いがいるのに、大胆な行動です。普通は恐ろしくて逃げたり、ひれ伏して拝んだりという行動に出そうですが。そのモーセに対して、神さまは語り掛けます。
- ・その一言目は、「近づくな、履物を脱ぎなさい」というものでした。そこは聖なる土地だからです。この言葉を元に、ユダヤ教の至聖所は神聖な場所とされてきました。しかしイエス様の十字架の死によって至聖所の垂れ幕は二つに裂け、その隔たりはなくなります。

(7月 31日)「出エジプト記 3 : 7~12」

モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」

(出エジプト記 3 章 11 節)

- ・神さまがモーセに語ったのは、驚くべき内容でした。「わたしはイスラエルの人々の苦しみを聞いた」、「わたしは降って行ってわたしの民をエジプトの手から救い出し、豊かで広い地、乳と蜜の流れる地に導き上る」、ここまでは、神さまの一方的な決意です。
- ・しかし続けて神さまは言われるのです。「わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」。モーセが「わたしは何者でしょう」と言いたくなるのもうなずけます。
- ・わたしたちの宣教も、これと同じです。「なぜわたしが?」、「神さまが直接やってくださいよ」と思う場面もたくさんあるかもしれません。しかし「共にいる」神さまと一緒に働くことが、とても大事なのです。

(7月 1日)「創世記 45 : 16~24」

いよいよ兄弟たちを送り出すとき、出発にあたってヨセフは、「途中で、争わないでください」と言った。

(創世記 45 章 24 節)

- ・ヨセフが兄弟たちと再会したことを聞いて、エジプトの王ファラオは家族をエジプトの地に来させなさいと言いました。このことから、ファラオはヨセフをいかに大切にしていたのかがわかります。
- ・ヨセフは兄たちが父の元に行くのに、車と食料、晴れ着を与えました。そして弟のベニヤミンには 5 着の晴れ着と銀 300 シェケルを与えます。以前自分が父からえこひいきされて兄に妬まれたのに、同じことをヨセフはベニヤミンに対しておこないます。
- ・さらに雌ろば、雄ろばそれぞれ 10 頭、穀物や食料、エジプトの最上のものなどなど、多くの物を持ち帰らせませす。そして一言、「途中で争わないでください」。兄たちはこの言葉を、どのような思いで聞いたのでしょうか。

(7月 2日)「創世記 45 : 25~28」

イスラエルは言った。「よかった。息子ヨセフがまだ生きていたとは。わたしは行こう。死ぬ前に、どうしても会いたい。」

(創世記 45 章 28 節)

- ・ついにヨセフが生きているという知らせは、父ヤコブ（イスラエル）の耳にも入りました。死んでいたと思っていた子どもが生きていたのです。その喜びは、ひとしおだったことでしょう。
- ・しかもヨセフがエジプトを治め、たくさんの食料を自由にできる権限をもっているとは。ヤコブは帰って来た息子たちの話を聞きながら、気を取り直しました。ベニヤミンが無事かどうか、ずっと気になっていたからです。
- ・そして、エジプトに向かうことを決意しました。このときヤコブは、生涯エジプトに移住する決意をしたのでしょうか。それとも一度顔を見たら、帰って来るつもりだったのでしょうか。

(7月 3日)「創世記 46 : 1~7」

わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す。ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう。

(創世記 46 章 4 節)

- ・イスラエル（ヤコブ）は自分の持ち物をすべて携え、エジプトに向かって旅立ちます。彼らが立ち寄ったベエル・シェバは、アブラハムやイサクがアビメレクと誓いをかわした場所でした。
- ・ヤコブはその地で、神さまにいけにえをささげます。そしてその夜、神さまは幻の中で「ヤコブ、ヤコブ」と呼びかけました。名前を二回呼ぶという呼びかけは、親しみをあらわしています。
- ・神さまは、ヤコブに次のことを約束します。すなわち、エジプトで彼らを大いなる国民にすること、ヤコブと共にエジプトに下ること、そして必ずヤコブを導き上るといことです。その約束を胸に、ヤコブたちはエジプトへと向かうのです。

(7月 28日)「出エジプト記 2 : 16~22」

羊飼いの男たちが来て、娘たちを追い払った。モーセは立ち上がって娘たちを救い、羊の群れに水を飲ませてやった。(出エジプト記 2 章 17 節)

- ・ファラオの手から逃れたモーセは、ミデヤンの井戸のほとりにいました。そこにミデヤンの祭司の 7 人の娘がやって来て、井戸の水を汲み、羊の群れに飲ませようとしていました。しかし羊飼いたちが彼女たちを追い出そうとします。
- ・ヤコブとラケルも、井戸で出会いました（創 29 : 1~8）。またイサクの妻を探しに行った僕（しもべ）も、リベカと井戸で出会いました（創 24 : 15~21）。井戸は当時の社交場であり、様々な出会いの場所でした。
- ・モーセは羊飼いから彼女たちを助けました。そのことがきっかけで、モーセはミデヤンの祭司レウエルの娘ツィポラを妻とします。彼はエジプト人と思われていたようです。そしていわゆる異邦人を妻としました。

(7月 29日)「出エジプト記 2 : 23~25」

それから長い年月がたち、エジプト王は死んだ。その間イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。(出エジプト記 2 章 23 節)

- ・モーセを捜し、殺そうとしたファラオは死にました。そして新しいファラオがエジプトの王となりましたが、彼の代になってもイスラエルの人々に対する厳しい姿勢は変わりませんでした。イスラエルの人々は変わらず、重い苦役にあえいでいました。
- ・イスラエルの人々の助けを求める叫び声は、神さまの元に届きます。祈りによるものか、どういう形なのかはわかりません。しかし確かに神さまはその声を聞かれ、み心に留められるのです。
- ・「わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。(創世記 17 章 7 節)」にあるように、神さまはアブラハムと契約を結ばれていました。神さまはそれを思い起こされたのです。

(7月 26日)「出エジプト記 2 : 1~10」

そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」 (出エジプト記 2 章 7 節)

- ・ここからモーセの生い立ちに入ります。祭司の家系であるレビの子孫の男女が結婚し、男の子を産みます。男の子はナイル川に投げ込まないといけませんでしたが、そんなことができるわけもなく、3 か月間こっそり隠していました。
- ・しかしもう隠しきれないと思い、パピルススの籠に入れ、水草の茂みに置いていました。赤ちゃんの姉(いつの間に生まれたのでしょうか?)が遠くから、その様子を探っていたところ、ファラオの娘がそれを見つけます。
- ・赤ちゃんはファラオの娘によって、モーセと名付けられました。「引き上げた(マーシャー)」に由来するエジプト名です。モーセの姉の機転により、赤ちゃんは実の母親の母乳によって育てられます。そして大きくなったモーセは、ファラオの宮廷で育つこととなります。

(7月 27日)「出エジプト記 2 : 11~15」

モーセは辺りを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺して死体を砂に埋めた。(出エジプト記 2 章 12 節)

- ・月日は流れ、モーセは成人しました。彼はファラオの娘の子どもとして育てられましたが、その出生については聞かされていたのでしょうか。彼は同胞のヘブライ人がエジプト人に打たれるのを見て、そのエジプト人を打ち殺し、砂に埋めてしまいます。
- ・そのことは翌日には、人々の知るところとなりました。誰かが打たれているのを見たからその人を殺す。それは「目には目を歯には歯を」という「報復するなら同じ程度にきなさい」との掟を超えた、「やりすぎ」の報復です。
- ・ファラオはこのことを聞き、モーセを殺そうとします。自分の部下が殺されたので、モーセを同じ目にあわせるということです。これは「同程度」の報復です。死を恐れたモーセはファラオの手を逃れ、ミデヤンの地にたどりつきました。

(7月 4日)「創世記 46 : 8~27」

ヤコブの腰から出た者で、ヤコブと共にエジプトへ行った者は、ヤコブの息子の妻たちを除けば、総数六十六名である。

(創世記 46 章 26 節)

- ・聖書には要所要所に、系図が書かれています。ユダヤでは、血筋や家系をとっても重要なものと考えていたからです。マタイによる福音書の冒頭がイエス様の系図から始まるのも、そのためです。
- ・ヤコブの系図は、その妻と妻の召し使いごとにまとめられています。ジルパはレアの、ビルハはラケルのそれぞれ召し使いでした。そのため、「ラバンが娘〇〇に与えた…」と書かれています。どこまでも所有物のように書かれており、あまり良い気はしません。
- ・ヤコブと共にエジプトに行ったのは、総勢 66 名だったそうです。ただし、ヤコブの息子の妻たちを除いてということです。妻たちをその数に入れられない理由は何なのでしょう。よくわかりません。

(7月 5日)「創世記 46 : 28~30」

イスラエルはヨセフに言った。「わたしはもう死んでもよい。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから。」

(創世記 46 章 30 節)

- ・多くの聖書には、「聖書地図」というものが付録としてつけられています。それを見ると、ベエル・シェバはユダの地方にありますが、ゴシェンはエジプトがある大陸の北側に位置しています。
- ・カナンからベエル・シェバを経由して、エジプトまでの道のりは大変厳しかったと思います。彼らはエジプトに到着する前にユダを先に行かせ、途中にあるゴシェンでヨセフと落ち合うことにします。
- ・そしてついに、ゴシェンの地でイスラエル(ヤコブ)とヨセフは涙の再会を果たします。父は「もう死んでもよい」とまで言い、喜びを噛みしめます。どうでもよいのですが、イスラエルとヤコブ、そろそろどちらかに統一して欲しいのですが。

(7月 6日)「創世記 46 : 31~34」

この人たちは羊飼いで、家畜の群れを飼っていたのですが、羊や牛をはじめ、すべての財産を携えてやって来ました』と申します。

(創世記 46 章 32 節)

・ヨセフが家族をファラオに会わせる前にゴシェンで待ち合わせしたのは、理由がありました。ヨセフは家族が一番平穩に暮らせる場所はどこかと考えていたのです。その場所が、彼らが落ち合ったゴシェンでした。

・イスラエル（ヤコブ）とその家族は、羊や家畜を飼っていました。エジプトではそのような職業は、忌み嫌われていたそうです。ちなみにユダヤの人たちは、豚を飼う人たちを忌み嫌っていました。

・「わたしたちは羊を飼う者です」、そのように言うことによって、ファラオは家族にゴシェンを与えてくれるだろう。それがヨセフの思惑でした。エジプトの中心地に呼び寄せたら、どのようなことに巻き込まれるかわからない、そのような思いもあったと思います。

(7月 7日)「創世記 47 : 1~6」

エジプトの国のことはお前に任せてあるのだから、最も良い土地に父上と兄弟たちを住ませるがよい。ゴシェンの地に住ませるのもよかろう。もし、一族の中に有能な者がいるなら、わたしの家畜の監督をさせるがよい。

(創世記 47 章 6 節)

・ヨセフは、父と兄弟たちがカナンの地からやって来たことをファラオに報告します。ヨセフは兄弟の中から 5 人を連れて、ファラオの元に行きました。その 5 人は誰だったのか、聖書には書かれていません。

・兄弟たちは、打ち合わせ通りにファラオの質問に答えていきます。自分たちは先祖代々羊飼いであること、そしてゴシェンの地に住みたいということです。

・ファラオはヨセフに答えます。すべてはあなたに任せているのだから、最良の地を用意しなさいと。ファラオがヨセフに厚い信頼を置いていることが、この一言からも伝わってきます。

(7月 24日)「出エジプト記 1 : 8~14」

エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した。イスラエルの人々はファラオの物資貯蔵の町、ピトムとラメセスを建設した。

(出エジプト記 1 章 11 節)

・ヨセフは当時のエジプト王ファラオの夢を解き明かし、エジプト全土を治める者となりました。そのときから 14 年の間に起こる出来事を言い当てたからです。その結果、エジプトは国中の銀、家畜、土地と穀物を交換し、豊かになりました。

・それから長い年月が過ぎ、エジプト王ファラオは代替わりをしていきます。聖書にはそれぞれのファラオの名前が書かれていませんのでわかりづらいですが、この先登場するファラオは、「ヨセフの功績を知らない」ファラオです。

・当時はグローバル社会とは到底言えず、自分たちと違う民族の人を受け入れることはあまりありませんでした。ファラオは彼らが強大になるのを恐れ、力を削ぐために彼らの重い苦役を課すことにしました。

(7月 25日)「出エジプト記 1 : 15~22」

「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子供の性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」

(出エジプト記 1 章 16 節)

・イスラエルの人々が増え続けるのを見て、ファラオは恐ろしい決断を下します。それはヘブライ人（イスラエル民族と同じ意味で使われています）が子どもを産んだときに、男の子であれば殺せということです。

・ファラオはこの命令を、シフラとプアという助産婦に対して告げました。二人だけですべてのヘブライ人の出産を助けたとも思えませんが、彼女たちはこの命令を拒みます。神さまを畏れていたからでした。

・「ヘブライ人の女性は丈夫だから、自分たち助産婦が到着する前に子どもを産んでしまう」という信じられないような嘘で、彼女たちは窮地を免れます。そこでファラオは、「生まれた男の子はすべてナイル川に投げ込め」という新たな命令を下すのです。

(7月 22日)「創世記 50 : 22~26」

ヨセフはこうして、百十歳で死んだ。人々はエジプトで彼のなきがらに藁を塗り、防腐処置をして、ひつぎに納めた。

(創世記 50 章 26 節)

・ついに創世記が終わります。7ヶ月半以上かけて、丁寧に読み進めてきました。何人の方が最後までお付き合いくださったか、心配ではありますが。(この文章がただの独り言になっていたら、少し悲しいです)。

・創世記の最後は、ヨセフの死で締めくくられます。ヨセフは 110 歳で亡くなりました。兄弟に語り掛ける場面があるので、兄弟の何人かはまだ生きていたのでしょう。彼は最後に、このことを告げます。

・それは神さまが必ずイスラエルの子らを顧み、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導き上るということです。それが明日から読んでいく「出エジプト記」の主題となります。ヨセフの埋葬は、そのときまで待たれることとなります。

(7月 23日)「出エジプト記 1 : 1~7」

イスラエルの人々は子を産み、おびただしく数を増し、ますます強くなって国中に溢れた。

(出エジプト記 1 章 7 節)

・今日から今年いっぱい掛けて、出エジプト記を読んでいきます。出エジプト記には 2 つの大きな物語が書かれています。一つはイスラエルの人たちがエジプトを脱出する物語、もう一つは神さまがモーセに与えた十戒の物語です。

・7 年間の飢饉の中でヨセフによってエジプトに連れて来られたイスラエル(ヤコブ)たち家族は、総勢 70 名でした。エジプトの王ファラオは、ゴシェンを彼らの住む場所として与えます。彼らは家畜を飼いながら、不自由なく暮らしていたことでしょう。

・また神さまの祝福によって、彼らの数はおびただしく増えていったようです。そのため、イスラエルの民はゴシェンのみならず、エジプトの国中に溢れていきます。このことが、騒動の発端となりました。

(7月 8日)「創世記 47 : 7~12」

ヨセフはファラオが命じたように、父と兄弟たちの住まいを定め、エジプトの国に所有地を与えた。そこは、ラメセス地方の最も良い土地であった。

(創世記 47 章 11 節)

・そして次に、ヤコブ(イスラエル)がファラオに接見します。ヤコブはまずファラオに対して、祝福の言葉を述べて挨拶しました。挨拶の前に相手を祝福するという、とてもよい習慣だと思います。

・ヤコブはすでに、130 歳になっていました。たしか以前、人間の寿命は 120 年にするという記述があったようにも思いますが。ただ彼の 120 年間は、大変労苦と悲しみが多い年月でした。

・ヨセフは家族に、ラメセスの地にある最良の地を与えます。聖書地図によれば、ラメセスはゴシェン地方にあるようです。ここで生涯不自由なく暮らせるように、ヨセフは彼らを導くのです。

(7月 9日)「創世記 47 : 13~19」

ヨセフは答えた。「家畜を連れて来なさい。もし銀がなくなったのなら、家畜と引き換えに与えよう。」

(創世記 47 章 16 節)

・ここから物語は一旦ヨセフの家族の元を離れ、エジプト内部のことに移ります。エジプトやカナンでは、依然として飢饉が続いていました。7 年間の飢饉が来るということは、一部の人は知らないことだったのでしょう。

・エジプトに食料が貯蔵されているという話は、人々の間に知られていたようです。人々は最初、銀を持って食料を買いに来ました。しかし飢饉は続きます。やがて銀は尽きてしまいます。

・次に人々は、家畜を差し出して食料を得ました。しかしまだ、飢饉は続きます。ついに人々は、自分たちの土地を差し出し、自分たちはファラオの僕となることで、食料を得ました。こうしてヨセフは、エジプトの地をファラオのものとしたわけです。

(7月 10日)「創世記 47 : 20~26」

彼らは言った。「あなたさまはわたしどもの命の恩人です。御主君の御好意によって、わたしどもはファラオの奴隷にさせていただきます。」

(創世記 47 章 25 節)

・エジプトの飢饉が続く中、ヨセフの政策によって人々の銀、家畜、土地はファラオのものとなりました。さらに人々は僕（新共同訳聖書では奴隷）としてファラオのために働くことを誓いました。さてヨセフは人々をどのように扱うのでしょうか。

・ヨセフは人々に、種を与えて土地に蒔くように伝えます。無償で与えるわけです。そして収穫をしたら、五分の一、つまり 20%はファラオに治め、残りは自分のものにしなさいと命じるのです。

・この政策は、人々の目には寛大なものだと映りました。土地も種もファラオのものだから、もっと搾り取ることもできたはずですが、しかしヨセフはそうしませんでした。その結果、人々の忠誠心がファラオの元に集まることになったのです。

(7月 11日)「創世記 47 : 27~31」

ヤコブは、エジプトの国で十七年生きた。ヤコブの生涯は百四十七年であった。

(創世記 47 章 28 節)

・ヤコブの一族は家畜を飼って生活しており、土地を持ってはいませんでした。そのため飢饉が来ると、彼らはたちまち食糧に困るようになりました。飢饉の中では誰も農作物を分けてくれないからです。

・エジプトの地でも、彼らはいわゆる寄留者でした。生活が保障されているとはいえ彼らはよそ者でした。ヤコブはそこで 17 年生きましたが、心の中には生まれ故郷に帰りたいという思いがあったのかもしれませんが。

・ヤコブはヨセフに願います。自分が死んだときには、先祖たちと同じ墓に葬って欲しいと。エサウとの件で一度ヤコブは家を出ました。一度は戻りますが飢饉のために、次はエジプトまで来ました。それでも自分の故郷に葬られ、先祖の列に加わりたいと願ったのです。

(7月 20日)「創世記 50 : 15~17」

ヨセフの兄弟たちは、父が死んでしまったので、ヨセフがことによると自分たちをまだ恨み、昔ヨセフにしたすべての悪に仕返しをするのではないかと考えた。

(創世記 50 章 15 節)

・父ヤコブは亡くなりました。するとヨセフの兄たちは不安になりました。計算上では 25 年以上前のことになりますが、兄たちはヨセフを売り飛ばし、つらい目にあわせてしまっていたからです。

・肉親からのいじめや裏切りは、とても心を傷つけます。なかなかその傷は癒されることはありません。きっと兄たちは、小さなことさえ許せない自分を知っていたのでしょう。だからヨセフも自分たちを許すはずがない、そのように思っていたかもしれません。

・兄たちは人を介して、父の言葉をヨセフに伝えます。本当に父ヤコブがそのようなことを言ったのかは分かりませんが、この言葉を聞いて、ヨセフは泣きました。これは悲しみの涙でしょうか。憐れみの涙でしょうか。それとも喜びの涙でしょうか。

(7月 21日)「創世記 50 : 18~21」

あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。

(創世記 50 章 20 節)

・昨日の箇所ではヨセフの兄たちは、人を介してヨセフに対する罪の赦しを乞いました。そして今日の場面では直接ヨセフの前にひれ伏して、「このとおりに、私どもはあなたの僕（しもべ）です」と言います。兄というプライドはどこにもみられません。

・ヨセフはそれを聞き、「そう言うのであれば」と兄たちを奴隷のように従えたのでしょうか。そんなことはありませんでした。それどころか、すべてのことは神さまのみ心であり、そのおかげで多くの民の命が救われたと言うのです。

・これこそが、ヨセフ物語の主題でした。すべてのことは、神さまのご計画の中で進んで行ったのです。人間の目から見たら苦しみに感じるときにも、いつも神さまがそばにいてわたしたちは生かされているのだと覚えておきたいと思います。

(7月 18日)「創世記 50 : 1~6」

ヨセフは自分の侍医たちに、父のなきがらに薬を塗り、防腐処置をするように命じたので、医者はイスラエルにその処置をした。(創世記 50 章 2 節)

・「なきがらに薬を塗り、防腐処置をするということは、ミイラにすることです。新しい聖書では、はっきり「ミイラ」という言葉が用いられています。新しい聖書に理解しやすくなった部分もあるということも、書いておきましょう。

・なぜヨセフは医者に、このような処置をするように命じたかという、父からエフロンの地にある洞窟に葬るように指示されたからです。そこまでの距離は遠く日数もかかるため、そのような処置が必要だったのです。

・ラケルが亡くなったときには、そのような処置ができる医者もいなかったのでしょうか。本当であればみんなと同じところに葬りたかったに違いありません。ところでイエス様はどうして、新しい墓に葬られたのでしょうか。

(7月 19日)「創世記 50 : 7~14」

一行はヨルダン川の東側にあるゴレン・アタドに着き、そこで非常に荘厳な葬儀を行った。父の追悼の儀式は七日間にわたって行われた。

(創世記 50 章 10 節)

・エジプトで寄留者だったヤコブ (イスラエル) は、17年間エジプトの地に滞在しました。その間彼らは財をなし、子孫も増えました。昨日の箇所ではヨセフは、父が葬って欲しいと言った場所に行かせて欲しいと、ファラオに願います。

・ファラオはヨセフやヤコブの家族だけではなく、彼の宮廷の元老である重臣たちすべてとエジプトの国の長老たちすべても一緒に行かせます。それほどまでにヨセフがエジプトでおこなった功績は大きかったのでしょうか。

・彼らは荘厳な葬儀の後、7日間追悼の儀式をおこないます。カナンの人たちはそれを見て、「エジプト流の荘厳な追悼の儀式だ」と感じます。本来エジプト人ではない彼らの式がそのように見えたこと、何かおかしさも感じてしまいます。

(7月 12日)「創世記 48 : 1~7」

ある人がヤコブに、「御息のヨセフさまが、ただいまお見えになりました」と知らせると、イスラエルは力を奮い起こして、寝台の上に座った。

(創世記 48 章 2 節)

・イスラエル 12 部族という言葉があります。イスラエル (ヤコブ) は 12 人の息子に嗣業の地を与え、それぞれの息子の名を土地の名前としました。しかしイスラエルの子ども名前と部族の名前は一致しません。

・部族の中にイスラエルの息子であるレビとヨセフの名前がなく、今日の箇所に出てくるマナセとエフライムというヨセフの息子二人の名前が付けられているのです。これはどういうことなのでしょう。

・レビは祭司の一族でしたので、土地を持ちませんでした。またイスラエルは今日の箇所では、ヨセフの二人の子を自分の子どもにしました。このことによってイスラエルの相続地は、ルベンやシメオンなどの兄弟とヨセフの息子の名前と呼ばれることになったのです。

(7月 13日)「創世記 48 : 8~16」

イスラエルは右手を伸ばして、弟であるエフライムの頭の上に置き、左手をマナセの頭の上に置いた。つまり、マナセが長男であるのに、彼は両手を交差して置いたのである。

(創世記 48 章 14 節)

・いよいよイスラエル (ヤコブ) に死が迫ってきました。彼はその前に、ヨセフの子たちを祝福します。昨日の箇所では、イスラエルはヨセフに「お前の二人の息子をわたしの子どもにしたい」と申し出ていました。

・ヨセフは兄のマナセをイスラエルの右側に、弟のエフライムを左側に向かわせて近寄せます。「神の右に座しておられます」という言葉もあるように、右の方が左よりも権威があると考えられていました。

・しかしイスラエルは手を交差して、弟の頭に右手、兄の頭に左手を置きます。兄と弟の祝福が逆転してしまうのです。イスラエル (ヤコブ) が父を騙して、兄エサウの祝福を奪い取った出来事が思い起こされます。

(7月 14日)「創世記 48 : 17~20」

ヨセフは、父が右手をエフライムの頭の上に置いているのを見て、不満に思い、父の手を取ってエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。

(創世記 48 章 17 節)

・手を交差して弟エフライムに右手を置く父を見て、ヨセフは不満に思いました。彼は、兄であるマナセに、大きな祝福が与えられるべきだと思っていたのです。自分は以前、夢で見たこととはいえ、兄たちが自分を拝むと伝えていたにもかかわらずです。

・しかしイスラエルは、「このままでいい」と手を交差させたままにしました。兄マナセも確かに大きくなるが、弟エフライムの方がより大きくなると、彼には分かっていたようです。

・そしてイスラエルは右手をエフライムの頭の上に、左手をマナセの頭の上に置いたまま、祝福を与えました。これにより、エフライムはマナセの上に立てられました。新しい聖書では、「上に立てられた」部分を「先になった」と訳しています。

(7月 15日)「創世記 48 : 21~22」

わたしは、お前に兄弟たちよりも多く、わたしが剣と弓をもってアモリ人の手から取った一つの分け前(シェケム)を与えることにする。

(創世記 48 章 22 節)

・イスラエルはヨセフに、自分が間もなく死ぬことを告げます。愛する妻リベカの子であるヨセフは、イスラエルの一族を飢饉から救い出しました。ですからイスラエルは、彼に特別な分け前を与えます。

・新しい聖書では「私はお前に、兄弟よりも一つ多く分け前を与える」と書かれている箇所は、前の新共同訳聖書では、「わたしは、お前に兄弟たちよりも多く、… 一つの分け前(シェケム)を与えることにする」と訳されていました。

・サマリアとシロの間に、シェケムという土地があります。その場所をヨセフは与えられたようです。やはり新しい聖書では、そのあたりの理解がしにくくなっているように感じてしまいます。

(7月 16日)「創世記 49 : 1~28」

ヤコブは息子たちを呼び寄せて言った。「集まりなさい。わたしは後の日にお前たちに起こることを語っておきたい。」

(創世記 49 章 1 節)

・今日の箇所は「ヤコブの祝福」という小見出しがつけられた箇所です。ヤコブは死に際し、12人の息子に対してそれぞれ祝福の言葉を語りました。しかしその内容を見ると、まず批判されている人(ルベン、シメオン、レビ)が目に入ります。

・また他の兄弟より明らかに内容が薄い人(ガド、アシェル、ナフタリ)もいて、彼らにしたならこれを素直に祝福だと感じることはできなかったでしょう。それに比べヨセフに対しては、ヤコブは長々と祝福の言葉を述べています。

・もう一人、好意的に書かれている人物がいます。それはユダです。「王笏はユダから離れず 統治の杖は足の間から離れない」と書かれている通り、マタイ福音書の系図によれば、イエス様はユダの子孫として誕生しています。

(7月 17日)「創世記 49 : 29~33」

それはカナン地方のmamレの前のマクペラの畑にある洞穴で、アブラハムがヘト人エフロンから買い取り、墓地として所有するようになった。

(創世記 49 章 30 節)

・日本にも「先祖代々のお墓に入る」という風習がありますが、ユダヤにおいてもそれは重要なことだったようです。ヤコブは、アブラハムがサラの埋葬のために購入した土地(創世記 23 章 9 節)に、自分も埋葬して欲しいと願っています。

・その墓は、カナンの地にあるmamレの洞窟にありました。そこにはサラとアブラハム、さらにイサクとリベカとレアが葬られました。ラケルは旅の途中で亡くなりましたので、エフラタに葬られましたが。

・ついにヤコブは息を引き取り、先祖の列に加えられました。この言い方も独特です。教会では逝去者記念礼拝のときに逝去者名簿を読み上げますが、そのようなイメージでしょうか。